

無名の若者は荻窪で作家とな

太宰治

明治四二(一九〇九)年六月十九日、
昭和二三(一九四八)年六月十三日

荻原茂

太宰治は明治四二(一九〇九)年六月十九日、青森県の四番目の資産家・津島家の六男として生まれました。本名は津島修治。生家は北津軽郡金木村(現、金木町)にあり、今は斜陽館という記念館となつています。経済的には恵まれた生活で、明治四五年頃から中学受験までのことは「思ひ出」に書かれています。高校は弘前高校に進みますが、そこは当時、日本でもっとも左翼運動の盛んだ

った学校で、資産家の負い目を感じながら太宰は新聞部に所属し、作家修業をしました。昭和五(一九三〇)年四月、東京帝国大学仏文科に入学。同年十一月、芸妓・小山初代と結婚するため、津島家を分家除籍されますが、その直後に、カフェの女性と鎌倉の海岸で心中、自分だけが助かるという事件を起こしました。このときの様子は「道化の華」「虚構の春」「狂言の神」などに描かれています。

その後、左翼運動にも関係しますが、まもなく離脱し、小説家を目指して「思ひ出」を書き出しました。荻窪には昭和八年二月に転居(荻窪では五軒の家で暮らし、最初の家は同郷の先輩・飛島家の離れで、内縁の妻・初代と暮らしました。その家での太宰は「おどちゃん」と呼ばれ、飛島家の赤ちゃんをとっても可愛がり、酒ばかりでなく、バナナと納豆が好物の好青年でした。その頃、太宰はまだ学生で、仲間からは「津島君」と呼ばれていました。昭和八年二月に発表した作品に初めて「太宰治」というペンネームを使い、同年三月に発表した「魚服記」により、新進作家として注目されます。無名の若者は荻窪で作家となつたのでした。昭和十年に

は「逆行」で第一回芥川賞候補に。惜しくも次席となりますが、翌年の六月には第一創作集『晩年』を刊行しました。その頃、太宰はパピナール中毒にかかっていて東京武蔵野病院(板橋区)に入院。ひと月後に完治して、荻窪の碧雲荘(民家兼アパート)に妻の初代と移り住みます。しかし、後に初代が入院中に姦通事件を起こしたことばかり、離婚。太宰は井伏鱒二の旧居から数分の所にある鎌滝という下宿に、昭和十二年六月に移り住みました。太宰は二階の四畳半を借りていましたが、この頃は一人暮らしの気安さもあって、太宰作品を愛好する文学青年が入り浸り、不規則な生活を送っていました。一方、新しい表現方法や文学観を模索している時期でもあり

ました。しかし、鎌滝での生活を見兼ねた井伏鱒二は、自身の滞在山梨県御坂峠の、美しい富士が望める天下茶屋に来るよう勧め、太宰は鎌滝を引き払い、天下茶屋に「思いを新たにする覚悟」「富嶽百景」で向かい、荻窪の地を去つたのでした。天下茶屋に引越して、程なく太宰は甲府に住む女性(石原美知子)と見合いをし、昭和一四年一月、井伏夫妻の媒酌の下、井伏邸で結婚式を挙げ、甲府でしばらく暮らします。生活は落ち着きを見せ始め、「富嶽百景」「右大臣実朝」「津軽」など戦中も名作を次々と発表していきます。戦後には「斜陽」「人間失格」(単行本は死後)などを発表し、時代の寵児となりますが、昭和二三年六月十三日、山崎富栄と終の栖と

なつた三鷹の自宅近くの玉川上水で入水しました。遺体は奇しくも太宰の誕生日の六月十九日に発見され、その日は太宰の作品「桜桃」にちなみ、桜桃忌と名づけられました。太宰が眠る三鷹の禅林寺で毎年法要が行われています。

column
太宰治と碧雲荘

碧雲荘は昭和初期に建てられた二階建ての民家兼アパート。太宰治は二階の八畳間で、昭和十一年十一月から妻の小山初代と暮らす。しかし、初代の姦通事件が発覚し、翌年の六月に鎌滝に単身で居を移した。

